受動の意味を持つ不定詞と結びつく sich lassen の統語構造と文体分析

—F.Kafka „Die Verwandlung“ の用例と—

柳　　武　司

1. はじめに

Lynkeus49 号で執筆した「受動表現に関する日独間翻訳のために」では，F.Kafka „Die Verwandlung“ に見られる werden 受動に関する日本語の翻訳表現について扱った[1)]。その結果として，ドイツ語の werden 受動を日本語の「られる」にしない訳文が多く存在し，受動にはならない表現に言い換えがなされていることが判明した。しかしドイツ語で Passiv と呼ばれる文法範疇は，助動詞 werden が過去分詞と結びつく動作受動だけではなく，Helbig/Buscha や小学館の独和大辞典でも述べているように[2)]，sein や bekommen 動詞と結びついて Passiv の意味を担っている用法も含まれており，werden 受動を対象とした調査だけでは日独間にある「受動」の違いを扱うのに不足を感じた。そこで werden 受動以外の形式として，デジタルデータを対象とした際に用例を検索するのが容易な sich lassen が不定詞と用いられる用法の調査を今回は対象としたい。この用法についてまずは辞書や文法記述を確認した後，文学作品中で実際に使用されている用例を取り上げ，werden 受動との差異を明らかにし，それが与える表現の効果について考察する。

2. 受動に関する辞書記述および先行研究

日本語辞書の記述として小学館の独和大辞典 „lassen“ の項を参照すると[3)]，2c）に「《再帰的に》《一種の受動的な表現として,…》」とあり，意味的には「黙許・容認・放置」「甘受」「《物事を主語として》可能」「使役；しばしば再帰的表現に lassen が加わった形で」と記されている。Duden Universalwörterbuch では lassen の再帰的用法について短い記述でこの用法に「可能性」（die Möglichkeit）が呈されることが記されているだけである

が[4]，Helbig/Buscha では話法の要素のある受動に関して以下の様に記されている[5]。

„Konkurrenzformen des Passivs mit Modalfaktor
Wenn Passiv-Paraphrasen einen Modalfaktor haben, so kann es sich im Deutschen um eine nezessitative Komponente (=müssen, sollen) oder um eine potentiale Komponente (=können) handeln."
「話法的要素のある受動と能動の競合形式
受動 - パラフレーズに話法の要素がある場合，ドイツ語では müssen や sollen といった必須成分あるいは können といった可能成分に関わる問題となる。」

Helbig/Buscha では，受動のパラフレーズには，動作を被る受動の意味だけではなく，müssen や sollen，können の意味が含まれる場合があることを述べている。これら法助動詞で表している意味を小学館の辞典では「黙許・容認・放置」などとしているのは，辞書の参照者に記述内容を理解し易くする為と思われる。Helbig/Buscha には上記記述の後に，1.sein と zu 不定詞が結びつく用法（können か müssen が含まれる），2.sein と語尾が -bar・-lich・-fähig の形容詞と結びつく用法（können が含まれる），3.es gibt と zu 不定詞句が結びつく用法(können か müssen が含まれる)，4.bleiben と zu 不定詞句が結びつく用法（müssen が含まれる），5.gehen と zu 不定詞句が結びつく用法（können が含まれる），そして 6. に今回対象とする sich lassen の用法が記載されている[6]。

„6.Reflexive Form, bestehend aus Sn + lassen + sich + Invinitiv + Modalbestimmung (Sn = P, Agens nicht hinzufügbar, aber in der Regel unbestimmt-persönlich)：
Das Buch läßt sich gut verkaufen. (= Das Buch kann gut verkauft werden.)"
「主語的主格 +lassen+sich+ 不定詞 + 様態規定から構成された再帰形式（主語的主格は人称のある名詞[7]，動作主は付加できず，通例不定の人称になる）：
その本はよく売れる。(werden 受動に können が加えられる形式と同様)」

様態規定が必要になる用法という条件はあるが，例文中の意味として法助動詞 können が含まれていることを表しており，純粋に動作を被ることだけを表す werden 受動とは異なった意味が付与されている。7 番目の記述にも lassen が用いられる用法があり，es と läßt+sich+ 不定詞 + 空間・時点規定 + 様態規定でやはり意味として können が含まれることが述べられている。

Duden 文法でも動詞の態（Diathese）の項目で werden・sein・bekommen の助動詞と過去分詞（Partizip Ⅱ）が結びつくことで受動形式が構成されることが記されている[8]。また，広い意味では，sich öffnen の様な能格化の再帰動詞（rezessive Reflexiva）や öffnen lassen の様な使役態複合（Kausativkomplexe）などの構文タイプ（Konstruktionstypen）に属するものとしている[9]。Hentschel/Weydt（1994）でも同様に[10]，lassen+sich+ 不定詞など「受動態の迂言法（Passivperiphrasen）」による受動表現が話法の要素を含んでいることが記されている。

人間など生物が主語になるか，あるいは事物が主語になるかで受動に含まれる法助動詞的意味にも差があり，事物が主語の用例では，können の意味が含まれることが専らで，「黙許・容認・放置」の意味は，人間など意思の有無を示せる生物でないと適用できない。ただし，人間が主語になった場合，動作を自分にしてもらう使役と甘受・許容の区別は形式的にはなく，発話場面か文脈上の前後関係がないと判別できない場合がある[11]。

A）Der Gast läßt sich（vom Friseur）rasieren.
← Der Gast veranläßt, daß er（vom Friseur）rasiert wird.（kausativ）

B）Der Hund läßt sich（vom Arzt）nicht behandeln.
← Der Hund läßt nicht zu, daß er（vom Arzt）behandelt wird.

A）は，理髪店に来た客が理髪師に依頼して受ける使役の表現であり，B）は犬が獣医に治療をさせないという許可あるいは甘受しない表現で，いずれも文法形式としての区別はなく，意味内容からこれらを判別する必要がある。

辞書及び文法書の記述を確認してみると，いずれも lassen を含む受動表

現については，話法の要素が含まれていることが指摘されており，文法書や辞書の記述に矛盾はない。そこで次に文学作品を参照し，今回対象とした用法を採取し，法助動詞の意味合いが確認できるのか，確認できるとしたらどの様なニュアンスで用いられるのか分析したい。

3. 文学作品に見られる sich lassen と翻訳表現

文学作品の調査対象としては，前回 werden 受動に関する調査を行い，その用例との比較も可能なので，F.Kafka „Die Verwandlung“ を対象とする[12]。sich lassen の用例は，werden 受動の生起頻度に比べると少ないが，すべて人間が主語である 11 例が見られた。自動詞は fallen の 3 例と hineinfallen の 1 例で，fallen だけでは単に落下することを表すだけであるが，sich fallen lassen で自分が意図的に落下することを表す。

1）Nun ließ er（Gregor）sich gegen die Rücklehne eines nahen Stuhles fallen, an deren Rändern er sich mit seinen Beinchen festhielt.「今度はそばにある椅子のよりかかりを目がけてとびかかり，小さな足をつかってその縁へしっかり抱きついた。」（中井訳 23 頁）[13]

しかし，これらはいずれも自動詞なので受動との関連ではない。

2）... als der Herr Chef selbst, der in seiner Eigenschaft als Unternehmer sich in seinem Urteil leicht zuungunsten eines Angestellten beirren läßt.「起業家という立場から，どうかすると従業員のひとりに不利益な裁決をなさりたがっているご主人よりも…」（中井訳 29 頁）

この場面はグレゴールが支配人に話している場面であり，上記の文は他動詞との結びつきであり，中井訳では「どうかすると」となっているが動詞として訳せば「惑わされる」となり，自分の意志ではないことを表している。発話者であるグレゴールにとっては，「迷う」beirren ことになっては不利益を被ることを表している。自分の意志ではない表現として，更に以下の verlocken と結びつく用法がある。語り手による叙述であるが，上

記とは異なり，グレゴールにとっては不利益になる。

3）…der（Alte）bei jeder Gelegenheit seine Befriedigung sucht, und durch den Grete jetzt sich dazu verlocken ließ, die Lage Gregors noch schreckenerregender machen zu wollen,…「…グレゴールの現在の境遇をもっと恐怖すべき状態へ陥れてみたい，という誘惑へグレーテの心を駆り立てていたわけだ。」(中井訳 55 頁)

自分の意思としての用法もあり，次の sehen との結びつきは意図的に人目にさらし，自分の姿が見られることを甘受する表現であり，その次の abbringen との結びつきでは，nicht で甘受しない旨の叙述になっている。

4）Er（Gregor）wollte tatsächlich die Tür aufmachen, tatsächlich sich sehen lassen und mit dem Prokuristen sprechen;「彼は本当にドアを開けようと思っていたのだ。実際に自分の変わり果てた姿を人目にさらして，支配人と話をするつもりだった。」（中井訳 22 頁）

5）Und so ließ sie（Grete）sich von ihrem Entschlusse durch die Mutter nicht abbringen...「それだから，妹は母親の忠告なんかで，自分の決心をひるがえそうとはしなかったわけだ…」（中井訳 55 頁）

上記の叙述はいずれも語り手によるものであるが，以下は作中人物による語りでの用例である。

6）Und gewiß hätte der Prokurist, dieser Damenfreund, sich von ihr lenken lassen; sie hätte die Wohnungstür zugemacht und ihm im Vorzimmer den Schrecken ausgeredet.「女に甘い支配人のことだから，妹がここにいてくれさえしたら御しやすいんだがなあ。」（中井訳 30 頁）

上記 lassen は，完了の助動詞 hätte が接続法 II 式で用いられ，非現実を表しているが，文中の主語である Prokurist が甘受してくれればよい，という発話者にとって利益になり，利害関係が含まれる受動になっている。以

下の führen との使役でも，ドアの所まで連れて行ってもらう，という主語にとって利益になることを表している。

7）Und auf die beiden Frauen gestützt, erhob er sich, umständlich, als sei er für sich selbst die größte Last, ließ sich von den Frauen bis zur Türe führen, …「二人の女に左右から支えられ，まるで自分の体が自分でひじょうな重荷であるかのように，ぎょうさんぶって起き上がり，女たちに戸口のところまで引き立てられると…」（中井訳 67 頁）

次の stören との用例では，不快にされている，あるいは我慢させられて聞いている有難迷惑な状態をよく表現することに成功しているように思われ，心理的に害された場合の日本語受動文と近い要素があるのではないか。

8）Es hatte nun wirklich den überdeutlichen Anschein, als wären sie in ihrer Annahme,ein schönes oder unterhaltendes Violinspiel zu hören, enttäuscht, hätten die ganze Vorführung satt und ließen sich nur aus Höflichkeit noch in ihrer Ruhe stören.「彼らはなにかかわいい曲か，楽しめる曲の演奏が聴けるものと予想していたので，失望して全曲を聴きとおすのにも飽いてしまい，礼儀上おだやかな方法で妨害をしているわけだ。」（中井訳 78 頁）

4. 考察

調査対象となった用例は，すべて主語が人間であり，日本語の受動と比較する際に都合の良いものである。それは，日本語の受動で本来物事が主語にならないことが分かっており[14]，事物が被害の受け身になることはない。ドイツ語の受動では，Duden 文法などを参照しても分かるように，事物が主語の場合 können で表されるニュアンスが含まれる例文しか見られず，当然のことながら事物に意思がないので甘受や被害の感情なども存在しない。しかし，人間が主語の場合は，前回調査した werden に比べ，不定詞と結びつく sich lassen には，前述した Duden や Helbig/Buscha が述べているように können 以外の法助動詞的要素があることが Kafka の作品からも読み取れた。自動詞との結びつきの場合は，意図的に落下するといった場面であり，被害の有無といった観点とは無関係である。他動詞との結

びつきでは，利害関係や甘受・迷惑といった要素が見られ，日本語の受動に含まれることの多い「被害」に近い要素も見られるのではないだろうか。訳文を見てみると，「られる」を用いた受動表現になっているのかというとそうではなく，ドイツ語でのニュアンスを表すための表現に変えている。全用例中「られる」を表す中井による和訳は 7）の sich führen lassen の使役 1 例だけで，「戸口のところまで引き立てられると」と訳されているが，内容を解釈すると父親が自分の為にしてもらっている場面で，「連れて行ってもらい」と訳すこともでき，主語の利益になるようにも受け取れる。またドイツ語から日本語にする際に明らかに意訳している例としては，2）sich in seinem Urteil leicht zuungunsten eines Angestellten beirren läßt「どうかすると従業員のひとりに不利益な裁決をなさりたがっている」，3）sich von ihr lenken lassen「妹がここにいてくれさえしたら御しやすい」，6）durch den Grete jetzt sich dazu verlocken ließ「誘惑へグレーテの心を駆り立てていた」の 3 つが原文との顕著な違いが見られる。利害関係の有無を見ると 2）は主語にとって不利益になり，3）と 6）は利益になる場面で，いずれも動作を被るだけの受動ではなく利害関係を含む表現であり，werden 受動とは異なる。これらの和訳で日本語の「られる」が用いられていない理由を推測すると，2）は，上司に取り入り状況を改善したい意図がある中での上司への発話のために日本語で謙譲語にしているので，被害を想起させる「られる」が用いにくいと思われる。また，3）の場合では利益になるので「られる」は用いず，6）では意味をとって意訳になっている別表現で，ドイツ語の原文を直訳すれば「グレーテによって（より悪い境遇へと）誘われてしまう」という自分の意志ではどうにもならない不利益な状況になる，という内容であろう。すべての用例を利害関係の観点からまとめると，自動詞と 7）以外はすべて利害関係を含む表現と思われる。

5. まとめ

辞書及び文法書の記述に於いて不定詞と結びつく sich lassen に法助動詞的意味合いがあることが記されていることを確認した後，F.Kafka „Die Verwandlung“ からの当該用例を採取して，翻訳例を参照しながら利害関係の有無について判別してきた。前回の調査対象である wreden 受動に比べて，利害関係が含まれると判断した用例が多く，他動詞との結びつきで

は「られる」と訳す用法は使役の1例のみである。しかも，その1例は被害を受ける受動ではなく，むしろ利益になるようにも思われる用法で，用例はすべて利害関係の含まれる用法とみなすことが出来よう。werden 受動が客観的に動作を被る表現であるのに対して，今回の調査対象となった sich lassen では，利害関係が明確に表れる用法であるといえ，この用例を採取する範囲を広げれば，利害関係の有無がより明確になるのではないだろうか。

課題としては，不定詞と結びつく sich lassen のより広い範囲の用例収集に加え，sein や bekommen と zu 不定詞が結びつく用法の収集と分析，それぞれの違いについて考察し，その表現の効果を確認したい。

参考文献

Dudenredaktion（Hrsg.）:Das Bedeutungswörterbuch. Duden Band 10. 4.Aufl. Berlin 2010.

Dudenredaktion（Hrsg.）:Die Grammatik. Duden Band 4. 8.Aufl. Berlin 2009.

Dudenredaktion（Hrsg.）:Deutsches Universalwörterbuch. 5.Aufl. Mannheim 2003.

Engel,U.:Deutsche Grammatik. Julius Groos. 2.Aufl.Heidelberg 1988.

Helbig,G./Buscha,J.:Deutsche Grammatik Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 7.Aufl. Leipzig 1996.（現代ドイツ文法の解説：西本美彦他訳．同学社．1994.）

Hentschel,E./Weydt,H.:Handbuch der deutschen Grammatik. 2.Aufl. Berlin 1994.

川村大：ラル形述語文の研究　くろしお出版　2012.

川島淳夫他（編）：ドイツ言語学辞典　紀伊国屋書店　1994.

国松孝二他（編）：独和大辞典　第2版　小学館　2000.

松村明（編）：日本文法大辞典　12版　明治書院　1998.

柳武司：受動表現に関する日独間翻訳のために．『リュンコイス』第49号 2015. 151～162頁

［データコーパス］

http://www.gutenberg.org/ebooks/22367/（Free ebooks by Project Gutenberg）

［日本語翻訳］

フランツ・カフカ（中井正文訳）：変身　角川文庫．1968.

注

1) 柳（2015）参照.

2) Helbig/Buscha（1996）1.8.10.2. Konkurrenzformen des Passivs mit Modalfaktor（S.186, 和訳は 195 頁）, 国松他（2000）lassen の項目参照. なお, 各文法書からの引用は, 旧正書法の場合でもそのままとした.

3) Ebd.

4) Dudenredaktion（2003）lassen の項を参照. イタリックは原文のままで, 以降の文法書からの引用も同様. 5.<l.+sich;in Verbindung mit Inf.> *die Möglichkeit zu etw. bieten; in bestimmter Weise geeignet sein*: das Material lässt sich gut verarbeiten, dehnen, biegen;... , Dudenredaktion（2010）lassen の項でも同様の記述内容で記されていた.

5) Helbig/Buscha（1996）S.186 参照.

6) Ebd.S.187 参照.

7) ここでの P は非人称の用法ではなく通常の人称のある名詞との意で解釈した.

8) Dudenredaktion（2009）4.5.2. Diathese: Aktiv, Passiv und Verwandtes の項参照. „Passivformen werden mit einem Passivhilfsverb（*werden, sein, bekommen*）und dem Partizip II eines Vollverbs gebildet. Beispiele（im Infinitiv）sind *gefunden werden*（*werden*-Passiv von *finden*）, *erzählt bekommen*（*bekommen*-Passiv von *erzählen*）und *geöffnet sein*（*sein*-Passiv von *öffnen*）.“「受動形は werden, sein, bekommen といった受動の助動詞と本動詞の過去分詞によって形成される。不定詞での例に finden の werden 受動である gefunden werden, erzählen の bekommen 受動である erzählt bekommen, そして öffnen の sein 受動である geöffnet sein がある。」

9) Ebd. „In einem weiteren Sinne gehören andere Konstruktionstypen ebenfalls hierher: rezessive Reflexiva wie sich öffnen, Kausativkomplexe wie öffnen lassen u.a.m.“ これらの記述については柳（2015）にて述べたことの再確認となる.

10) Hentschel/Weydt（1994）S.125 Passivperiphrasen の項参照.

11) Helbig/Buscha（1996）S.187. „Mit diesen Konstruktionen sind nicht zu verwechseln oberflächlich ähnliche Konstruktionen, in denen das Verb *lassen* eine andere Bedeutung und auch das Subjekt semantisch einen anderen Charakter（ immer belebt, meist menschlich ）hat. “ の記述に続く用例.

12) Web 上のデータコーパスからの作品データを利用。正書法も Web 上のまま.

なお，人称代名詞に元の名詞を記したことと，下線部は今回の調査対象として筆者による．用例の掲載順は説明の都合に合わせて前後させた．

13）下線部は，ドイツ語で下線を引いた個所に対応する訳文と判断した個所に筆者が記した．

14）松村（1998）「受動」の項参照．いわゆる非情の受身．これは本来の日本語ではほとんど用いられなかったものであって，欧文の翻訳文の影響でさかんに行われるようになったものである．他動詞の目的語となる非情物（有情物以外のもの）を主語とする表現に用いる．「犯罪が当局によって摘発される」．